

「計測自動制御学会第7回生体・生理工学シンポジウム」

白井支朗*

計測自動制御学会主催の第7回生体・生理工学シンポジウム (BPES'92) が、22学協会の協賛を得て、平成4年11月26, 27, 28日の3日間にわたり、豊橋技術科学大学で開催された。本シンポジウムは、1983年に発足した同学会の生体・生理工学調査研究委員会の2カ年にわたる活動の総括提案として企画され、「生理学・生物学的なアプローチだけでなく、計測・情報などの工学的なアプローチを駆使して、複雑・多様、かつ高度な機能を有する生体のメカニズムを追求するとともに、その成果を工学へフィードバックする」という目的をもって、第1回が1986年に名古屋で開催された。当時はまだ、今日のニューラルネットなどの隆盛以前の時代であり、極めて先見性の高い企画であった。以後、豊橋、大阪、東京、福岡、横浜と回を重ね、第7回は東北という予定であった。第1回、第2回を担当させて頂いた後、年毎に活性化し、定着してきた本シンポジウムの発展を眺めているのは心地良いものであった(まだ当分はまわってこないだろうと……)。ところが、横浜の前後で雲行きがあやしくなってきた。発足当時、苦勞を共にした伊藤(宏)部会主査の命とあっては断るわけにもいかず、中部地区の運営委員である三田(愛知県コロニー)、大西(名大)、岩田(名工大)の各先生方と相談の上、少々早いと思われたがお引き受けすることにした。

やると決まれば、せつかくの機会でもあり、ニューロや脳科学など、この間の大きな時代の変革を今一度捉え直し、新しい試みを取り入れることにした。すなわち、本来の主旨であるテーマセッション方式の意義を一層有効にするために、発表・討論の時間を十分とること、そ

のためには、これまでの2日間の会期では到底無理であり、3日間とすること、論文の質・レベルの一層の向上を期待してプログラム委員会を構成し査読方式を取り入れること、などを検討した。また、論文集のフォーマット(英文タイトル・アブストラクトの追加など)も再検討し、ページ数も4ないし6ページとした(この結果、論文集は480ページとなった)。幸い、こうした新しい試みは、大方うまくいったようである(世話人の勝手な思い込み?)。特に、4つのセッションでは、キーノート・レクチャ(各60分)を企画し、その分野の動向とセッションのとりまとめをお願いしたが、大変好評であった。また、筆者の恩師である、カリフォルニア大学バークレー校のスターク教授の来日と日程をあわせ、特別講演「Top-down Vision in Humans and Robots」をお願いした。今日の脳科学の隆盛を見通した同教授の長年の研究成果が、とても新鮮に思えた。

今回の一般セッションテーマおよびキーノートレクチャは以下の通りである。

- (1) 細胞生理学 I, II (7件)
- (2) 視覚系の情報処理 I, II, III (13件)
「顔情報の脳内表現」山根 茂(電総研)
- (3) 明るさ・色知覚の神経機構 I, II (7件)
「明るさ・色・立体処理における復元機構」乾 敏郎(京大)
- (4) 呼吸系 (4件)
- (5) 感覚系 I, II (9件)
- (6) 生体計測と解析 I, II (10件)
- (7) リハビリテーション生理学 (4件)
- (8) 脳活動の解析 I, II (8件)
- (9) 光計測 (5件)
- (10) 生体リズムとゆらぎ I, II (9件)
- (11) 神経回路網 (6件)

平成5年2月3日受付

*豊橋技術科学大学

〒441 愛知県豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1

(12) 運動系 (5件)

「運動の中枢制御機構」笠井 健 (阪大)

(13) 循環系 (5件)

(14) 生体システムの非線形解析 (6件)

「非線形システムと非線形ノイズの解析および生物学への応用」佐藤俊輔 (阪大)

以上、14テーマ、22セッションで構成され、演題数は98件、参加者は220余名であった。各セッションおよび講演内容の詳細は、プログラム(計測と制御、10月号、お知らせ35~39頁)あるいはシンポジウム論文集(計測自動制御学

会事務局にお問い合わせ下さい)をご覧ください。

第8回シンポジウムは、石田明允(東医歯大・医器材研)主査、佐藤俊輔(阪大・基礎工)副査の新体制の下に、平成5年11月16から18日、仙台で開催される予定である。

最後に、快くキーノートレクチャをお引き受け頂いた各先生方、並びに貴重な論文を発表頂いた講演者各位に感謝申し上げます。また、ご協力頂いた部会運営委員、学会事務局、シンポジウムの雑事を御願ひした本学の池野英利、神山齊己、羅志偉、石井宏幸の各氏、協賛頂いた関係学協会並びに助成を賜った豊橋市、財団・企業の各位に併せて御礼申し上げます次第である。



(写真1) 会場風景



(写真2) スターク教授と御手洗玄洋先生